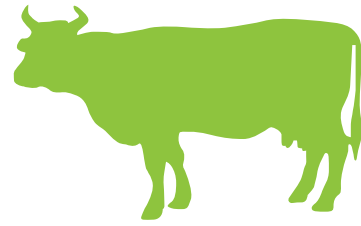


# 牛肉



## ◆ 飼養動向

### 4年2月現在の肉用牛の飼養頭数、前年比0.3%増

肉用牛の飼養戸数は、生産者の高齢化などによる離農の進行により、小規模層を中心に減少傾向が続いており、令和4年（2月1日現在、以下同じ）は、4万400戸（前年比4.0%減）と前年からやや減少した（図1）。

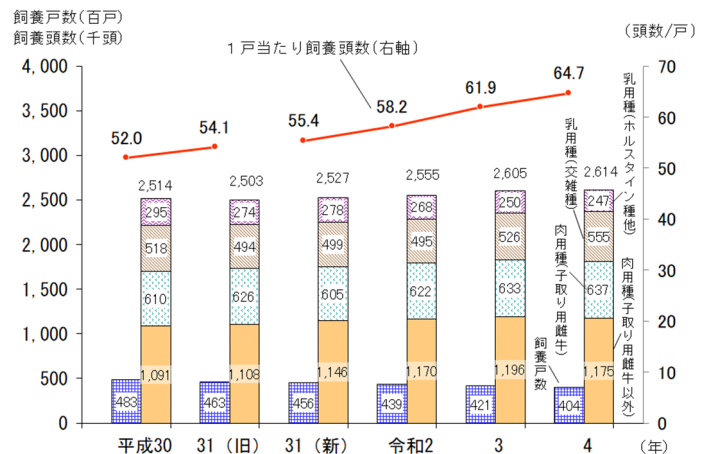
総飼養頭数は、平成29年から増加傾向で推移しており、令和4年は、261万4000頭（同0.3%増）と前年並みであった。肉用種と乳用種をそれぞれ見ると、肉用種は、平成28年以降、子取り用雌牛（繁殖雌牛）頭数が増加基調で推移していたものの、令和4年は、181万2000頭（同0.9%減）と前年からわずかに減少した。乳用種<sup>（注）</sup>のうち交雑種は、平成30年以降、乳用牛の減少に加え、乳用牛への受精卵移植技術の活用などによる和子牛の生産拡大や乳用後継牛を確保する動きから減少傾向で推移したものの、乳用牛の頭数が回復傾向の中で、酪農家における乳用牛への黒毛和種交配率が上昇したことなどにより、令和4年は、55万5300頭（同5.6%増）と前年からやや増加した。乳用種のうちホルスタイン種他は、性別別精液の利用拡大などにより、乳牛去勢の減少が続いていることから、4年は、24万6900頭（同1.3%減）と前年からわずかに減少した。

この結果、1戸当たりの飼養頭数は、64.7頭（同

4.5%増）と前年からやや増加し、経営規模の拡大が進展していることがうかがえる。

（注）肉用牛の「乳用種」とは、「畜産統計」では、ホルスタイン種、ジャージー種などの乳用種のうち、肉用を目的に飼養している牛で、F1などの交雑種を含むと定義されている。

図1 肉用牛の飼養戸数および飼養頭数の推移



資料：農林水産省「畜産統計」

注1：各年2月1日現在。

注2：平成31年（旧）までは従来実施してきた飼養者を対象とした統計調査、平成31年（新）および令和2年、3年は牛個体識別全国データベースなどの行政記録情報や関係統計により集計した加工統計であり、統計手法が異なる。

注3：平成31年（新）のホルスタイン種他の飼養頭数は、機構にて当該年の乳用種飼養頭数から交雑種飼養頭数を減じて算出した。

## ◆ 生産

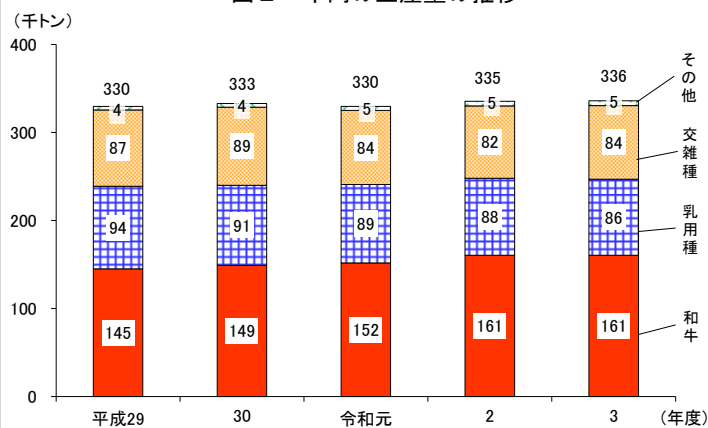
### 3年度の生産量、前年度比0.2%増

牛肉生産量は、近年、減少傾向で推移していたが、平成29年度以降の生産基盤強化対策の実施により繁殖基盤が拡大に転じたことなどにより、和牛を中心におおむね増加傾向で推移している。

令和3年度は、和牛は16万601トン（前年度比0.0%

増）と前年並み、交雑種は8万3630トン（同1.9%増）と前年度をわずかに上回った一方、乳用種は8万6423トン（同1.3%減）と前年度をわずかに下回った（図2）。この結果、全体では33万6083トン（同0.2%増）と前年並みとなった。

図2 牛肉の生産量の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」  
注：部分肉ベース。

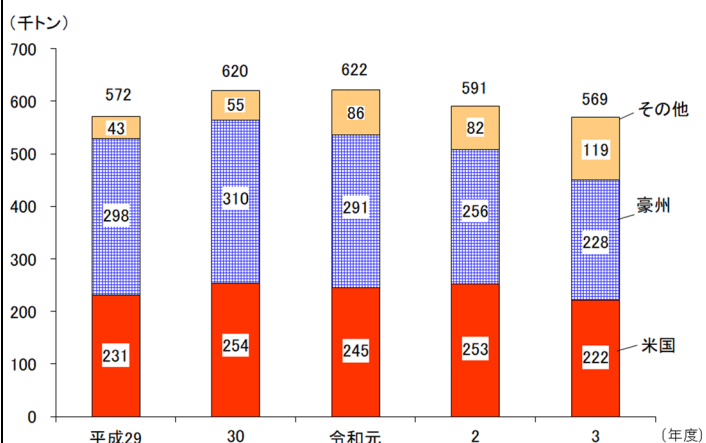
## ◆ 輸入

### 3年度の輸入量、前年度比3.7%減。2年連続の減少

牛肉輸入量は、近年、焼き肉やハンバーガーなどの外食産業を中心に牛肉の需要が拡大していたことから、おおむね増加傾向で推移し、平成28年度から令和元年度までは4年連続で増加していた。しかしながら、令和2年度は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響による海上輸送の遅れや、緊急事態宣言に基づく外出自粛要請による外食需要の減少などから減少に転じた。令和3年度は、COVID-19の影響のほか、干ばつ後の牛群再構築により豪州産の生産量が減少したことや、米国産の現地相場が上昇したことなどから、56万9107トン（前年度比3.7%減）と前年度をやや下回り、2年連続の減少となった（図3）。

国別輸入量を見ると、豪州産は、22万8100トン（同10.9%減）と前年度をかなりの程度下回り、米国産は、22万1918トン（同12.2%減）と前年度をかなり大きく下回った。

図3 牛肉の輸入先別輸入量の推移

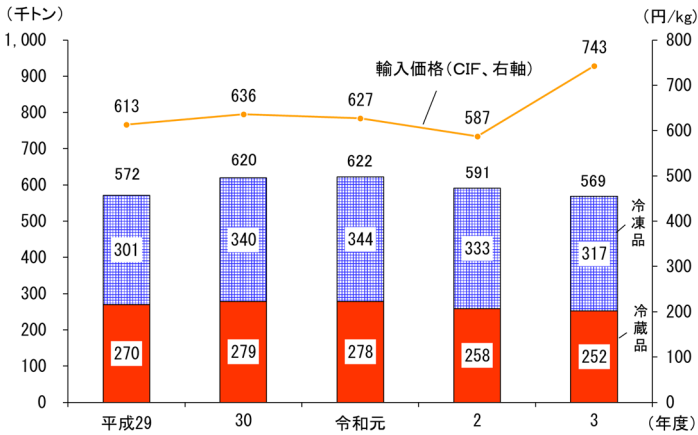


資料：財務省「貿易統計」  
注：部分肉ベース。くず肉などを含む。

輸入牛肉のうち、冷蔵品は主にテーブルミートとして量販店などで販売されており、冷凍品は加工用や業務用として利用されていることが多い。近年、いずれも増加基調で推移していたが、COVID-19の影響などにより、その傾向に変化が見られている。3年度は、冷蔵品は25万1889トン（同2.4%減）とわずかに、冷凍品は31万6918トン（同4.7%減）とやや、いずれも前年度を下回り、冷蔵品は3年連続、冷凍品は2年連続の減少となった（図4）。

輸入価格（CIF）を見ると、1キログラム当たり743円（同26.5%高）と前年度を大幅に上回った。

図4 牛肉の冷蔵品・冷凍品別輸入量および輸入価格の推移



資料：財務省「貿易統計」  
 注1：部分肉ベース。  
 注2：合計にはくず肉などを含む。

◆ 輸出

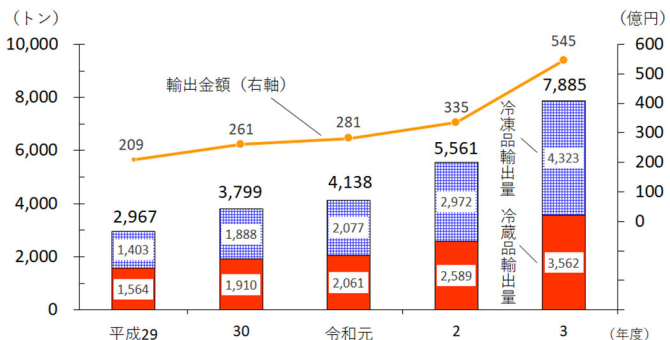
3年度の輸出量、前年度比41.8%増。8年連続で増加

牛肉輸出量は、販路の開拓や販売促進の効果などにより、8年連続で増加している。

令和3年度は、全世界的なCOVID-19の流行の中でであっても、7885トン（前年度比41.8%増）、輸出金額は545億円（同62.9%増）と、いずれも過去最高となった（図5）。

輸出量の内訳を見ると、冷蔵品は3562トン（前年度比37.6%増）、冷凍品は4323トン（同45.4%増）となった。冷蔵品と冷凍品の割合は、元年度までは同程度で推移していたが、2年度に続き3年度も冷凍品の割合が冷蔵品を1割程度上回っている。

図5 牛肉の輸出量および輸出金額の推移



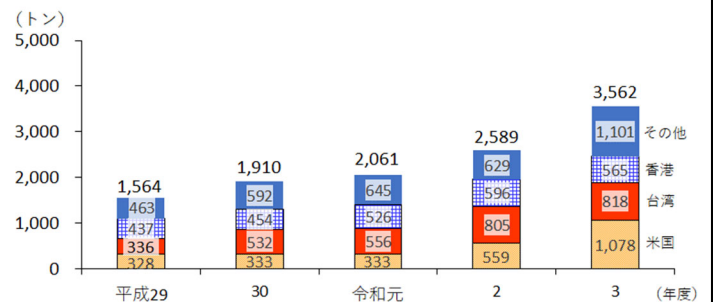
資料：財務省「貿易統計」  
 注：部分肉ベース。

日本からの牛肉の輸出が可能な国・地域は、アジアを中心に中東、欧州、北米・中南米、大洋州のさまざまな

国や地域に広がっている。輸出先については、牛肉全体で見ると多くがアジアに輸出されているが、冷蔵品と冷凍品で輸出先は異なっている。

冷蔵品の輸出先を見ると、3年度の最大の輸出先は米国で1078トン（シェア30.3%）、次いで台湾が818トン（同23.0%）、香港が565トン（同15.9%）となり、上位3カ国・地域で約7割を占めている（図6）。

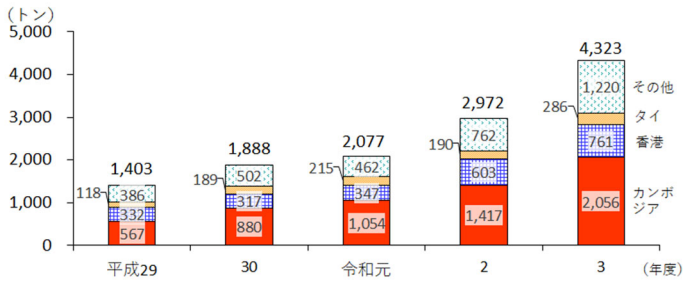
図6 牛肉の冷蔵品の輸出先別輸出量の推移



資料：財務省「貿易統計」  
 注：部分肉ベース。

冷凍品の輸出先を見ると、令和3年度の最大の輸出先は前年度に続きカンボジアで2056トン（シェア47.6%）、次いで香港が761トン（同17.6%）、タイが286トン（同6.6%）となり、上位3カ国・地域で約7割を占めている（図7）。

図7 牛肉の冷凍品の輸出先別輸出量の推移



資料：財務省「貿易統計」  
注：部分肉ベース。

## ◆消費

3年度の推定出回り量は前年度比4.7%減、家計消費は同7.6%減

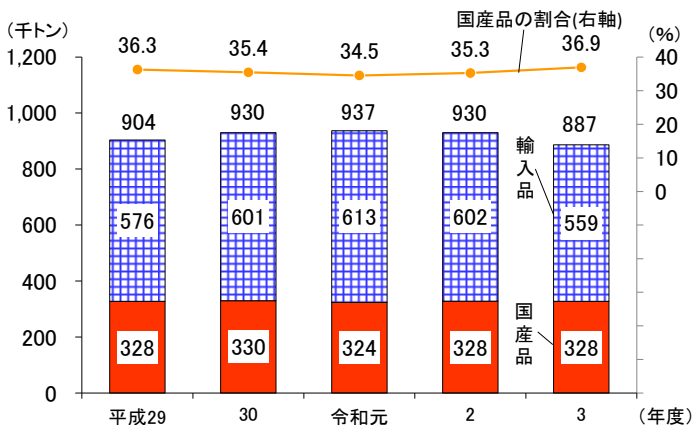
### 推定出回り量

牛肉の推定出回り量は、近年の好景気などを背景に外食を中心に好調に推移してきたが、COVID-19の影響などにより、令和3年度は、88万6951トン（前年度比4.7%減）と前年度をやや下回り、2年連続の減少となった（図8）。

出回り量の内訳を見ると、国産品は、32万7568トン（前年度比0.1%減）と前年度並みとなったものの、輸入品は、現地相場の上昇の影響などによる輸入量の減少などにより、55万9383トン（同7.1%減）と前年度をかなりの程度下回った。

なお、合計に占める国産品の割合は36.9%（同1.6ポイント増）と、6年ぶりに増加に転じた前年度に続き、2年連続で前年度を上回った。

図8 牛肉の推定出回り量の推移



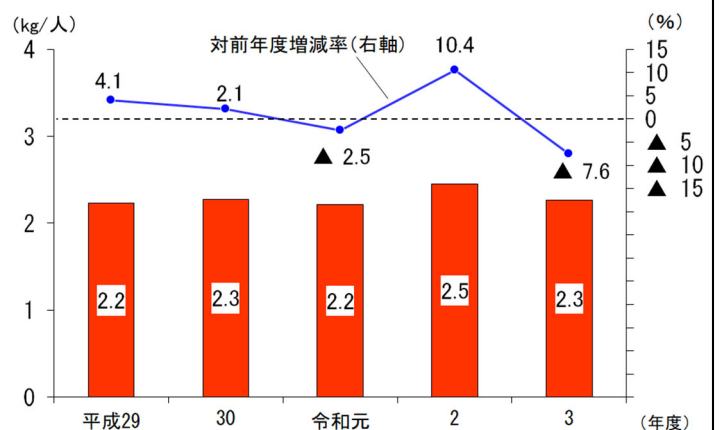
資料：農畜産業振興機構推計  
注：部分肉ベース。

### 家計消費

牛肉消費量の約3割を占める家計消費は、近年の景気回復や好調な牛肉需要を背景におおむね増加傾向で推移してきた。

令和3年度は、前年度のCOVID-19の影響による内食需要の反動などにより、年間1人当たり2.3キログラム（前年度比7.6%減）と、前年度をかなりの程度下回った（図9）。

図9 牛肉の家計消費量（全国1人当たり）の推移



資料：総務省「家計調査報告」

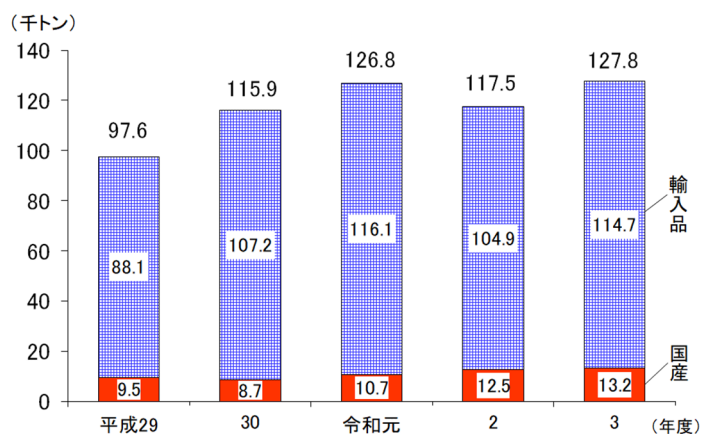
## ◆在庫

## 3年度の推定期末在庫、前年度比8.8%増

牛肉の推定期末在庫は、平成30年度は需要を上回る輸入があり、令和元年度はCOVID-19の影響による外食需要やインバウンド需要の減退などがあり、2年連続で前年度を上回った。

令和2年度は輸入量の減少などにより、前年度を下回ったものの、3年度はCOVID-19の影響による需要の減退などにより、全体で12万7825トン（前年度比8.8%増）と前年度をかなりの程度上回り、再び増加に転じた（図10）。このうち、輸入品は11万4655トン（同9.3%増）とかなりの程度、国産品は1万3170トン（同5.0%増）とやや、いずれも前年度を上回った。

図10 牛肉の推定期末在庫の推移



資料：農畜産業振興機構調べ

注1：部分肉ベース。

注2：四捨五入の関係で、合計値は必ずしも一致しない。

## ◆枝肉卸売価格

## 3年度の牛枝肉卸売価格、和牛、交雑種、乳用種のすべてで上昇

## 和牛

和牛（東京・去勢A-5、A-3）の枝肉卸売価格は、近年の肉ブームの一層の高まりや生産量の減少を背景に、高い水準で推移していたものの、令和元年度は、生産量の増加、消費税増税等による消費者の節約志向などに加え、COVID-19の影響でインバウンド需要や外食需要が減退したことにより、価格が低下した。2年度は、5月以降、経済活動の再開や輸出の回復に伴い上昇し、10月には前年同月と同水準、11月以降は前年を上回る水準で推移した。

3年度は、年度前半は2年度に続き、前年を上回る水準で推移したものの、後半に入り、COVID-19の感染拡大が見られる中で外食需要などが低迷し、おおむね前年を下回って推移した。この結果、年度全体としては、A-5が1キログラム当たり2666円（前年度比6.6%高）、A-3が同2172円（同8.8%高）と、いずれも前年度をかなりの程度上回った（図11）。

## 交雑種

交雑種（東京・去勢B-3）の枝肉卸売価格は、近年、和牛の相場高を背景に、比較的手頃な価格帯で適度に脂肪交雑が入っている交雑種への引き合いが高まったことなどにより堅調に推移している。

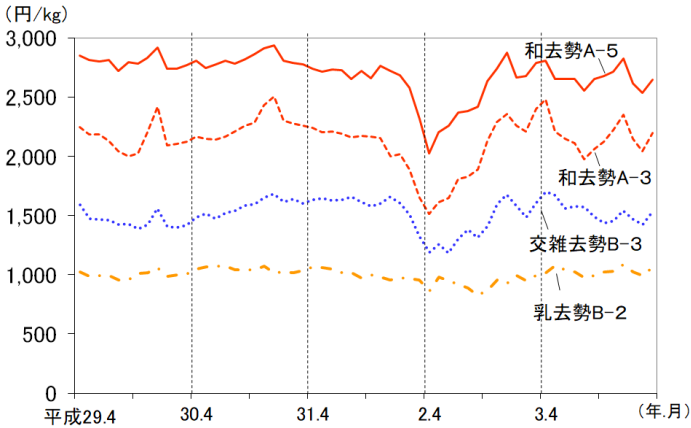
令和3年度は、生産量が増加したものの、引き続き需要は高く、1キログラム当たり1536円（前年度比8.6%高）と前年度をかなりの程度上回った。

## 乳用種

乳用種（東京・去勢B-2）の枝肉卸売価格は、国産牛の中でも比較的安価で赤身が多い牛肉への底堅い需要がある一方で、生産量が減少傾向となっていることから堅調に推移している。

令和3年度も、生産量は引き続き減少となったことに加え、輸入牛肉の価格上昇による代替需要などがあり、1キログラム当たり1030円（前年度比11.3%高）と前年度をかなり大きく上回った。

図11 牛肉の卸売価格（東京・品種・規格別）の推移



資料：農林水産省「食肉流通統計」  
注：消費税を含む。

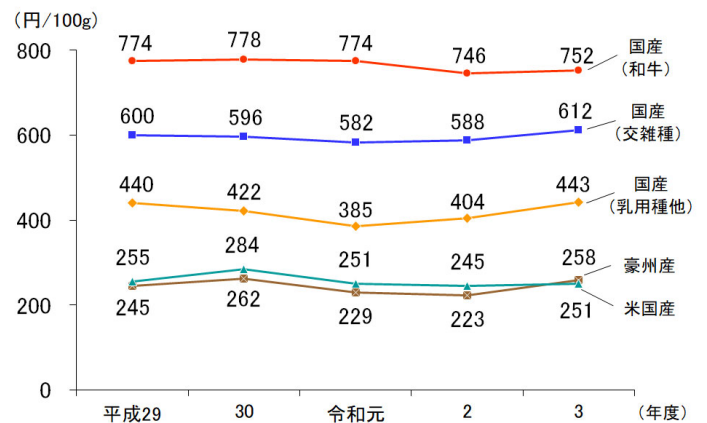
### ◆小売価格

#### 3年度の小売価格、和牛、交雑種、乳用種のすべてで上昇

牛肉の小売価格は、品種や部位によって動きは異なるものの、おおむね横ばいで推移している。なお、国産品については、近年の枝肉の相場高を背景に、比較的高値が続いており、令和3年度は、国産品、米国産、豪州産のいずれも価格が上昇した（図12）。

3年度の小売価格（ばら）は、和牛は1キログラム当たり752円（前年度比0.8%高）、国産牛（交雑種）は同612円（同4.1%高）、国産牛（乳用種他）は同443円（同9.7%高）、米国産は同251円（同2.4%高）、豪州産は同258円（同15.7%高）となった。

図12 牛肉の小売価格（ばら）の推移



資料：農畜産業振興機構調べ  
注：消費税を含む。

### ◆肉用子牛

#### 3年度の肉用子牛価格、黒毛和種は前年度比8.1%高

##### 黒毛和種

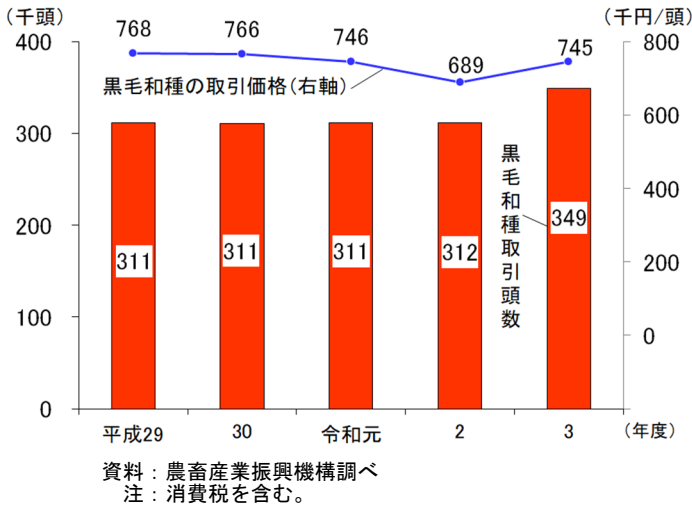
家畜市場における黒毛和種の子牛取引頭数は、減少傾向にあった繁殖雌牛が生産基盤強化対策の実施などにより平成28年度に増加に転じ、近年は安定して推移している。令和3年度は、34万8877頭（前年度比11.9%増）と前年度をかなり大きく上回った（図13）。

また、子牛取引価格は、28年度をピークに低下して

いるものの、引き続き高い水準で推移している。

3年度は、COVID-19の影響により低下していた前年度から、枝肉価格の上昇などにより回復し、1頭当たり74万5000円（同8.1%高）と前年度をかなりの程度上回った。

図13 黒毛和種の取引頭数と市場取引価格の推移

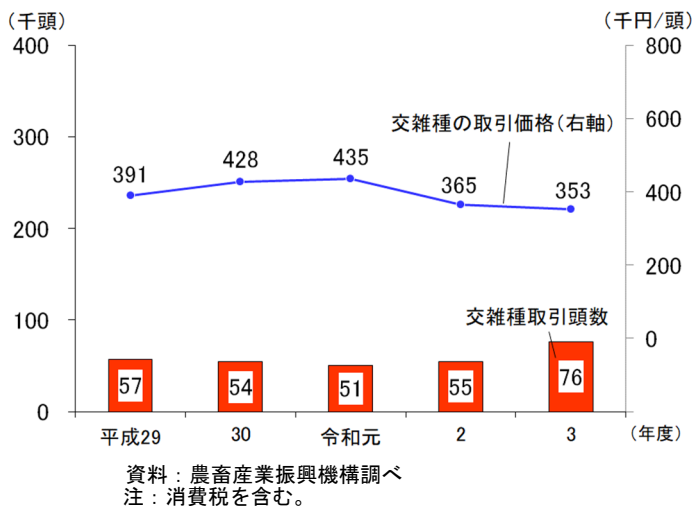


## 交雑種

家畜市場における交雑種の子牛取引頭数は、乳用牛への受精卵移植技術の活用などによる和子牛の生産拡大や乳用後継牛を確保する動きから、令和元年度までは前年度を下回って推移した。しかしながら、乳用牛の頭数が回復傾向の中で、酪農家における乳用牛への黒毛和種交配率が上昇したことにより令和2年度に増加に転じ、3年度も、7万6120頭（前年度比39.0%増）と前年度を大幅に上回り、2年連続の増加となった（図14）。

また、交雑種の子牛取引価格は、近年の枝肉の相場高や出荷頭数の減少を背景に、平成29年度を除いた25年度から令和元年度までは前年度を上回って推移した。しかしながら、取引頭数の増加などにより2年度に下落に転じ、3年度も、1頭当たり35万3000円（前年度比3.3%安）と前年度をやや下回り、2年連続で低下した。

図14 交雑種の取引頭数と市場取引価格の推移



## ホルスタイン種

家畜市場におけるホルスタイン種の子牛取引頭数は、近年、おおむね1万2000頭台で推移している。令和3年度は、酪農家における飼養頭数の増加傾向が継続しており、1万2078頭（前年度比8.3%増）と前年度をかなりの程度上回った（図15）。

また、ホルスタイン種の子牛取引価格は、枝肉の相場高、取引頭数の減少などを背景に、平成27年度以降、高水準で推移している。令和3年度は、1頭当たり23万6000円（前年度比1.7%高）と前年度をわずかに上回った。

図15 ホルスタイン種の取引頭数と市場取引価格の推移

